

議 事 録

会議名	令和7年度 第2回三鷹市認知症地域支援ネットワーク会議事録
日 時	令和7年9月4日（木）午後6時30分～午後8時30分
会 場	教育センター3階 大研修室
出席委員	<p>【委員】            神崎恒一、木之下徹、望月謙治、齋藤貴彦、小宮慎太郎、服部将志、道三啓悟、榊山貴大            （順不同・敬称略）            &lt;定足数10人中8人出席(欠席：菊池健、東郷清児)：有効&gt;</p> <p>【関係者】            鈴木敏明、藤島岳彦、惣戸恵三子、木村勇三</p>
市 （事務局）	健康福祉部調整担当部長、 健康福祉部高齢者支援課長、 高齢者支援課介護予防係長 他事務局5人
会議の 公開・非公開	公開
傍聴人数	1人
○ 委員自己紹介	
議事（司会：神崎会長）	
（1）認知症に関する条例の制定に向けた市民意識調査結果について	
委員	この膨大な量の聞き取りとアンケートは、三鷹の財産になると思う。資料4の4番の希望と現実のギャップで、約6割が地域での暮らしを希望していて介護事業所を運営している中で身に染みた。この思いを実現していただきたい、そういう思いに寄り添いたいと思う。
司会	地域生活の継続希望は認知症の人との接点の有無と関連がある。認知症の人と関わりのある人と、そうでない人の間で、「あなたが認知症になった場合、地域で暮らしたいと感じますか」という問いに対して、認知症の人と関わりがある人の方が、より地域で暮らしたいと感じていらっしゃる方の割合が多いという表の見方になると思う。一方で施設での生活を希望する方で、認知症の人との接点がある人とないの間では、数に大きく違いはない。基本的には自分が認知症になったとしても、住み慣れた三鷹で暮らしたいと思っている人が非常に多い。ただ現実としては、家族に迷惑をかけるわけにもいけないので、自分が認知症になったら施設に入らないといけないという現実と、希望には開きがあるということがアンケートの結果からわかる。
委員	資料5の基本的施策について、新たに項目が追加になり、市民の声が反映されていると実感できた。教育の部分が大事だと感じた。夏休みに、社会福祉協議会と夏体験ボランティア企画で、認知症啓発をしている。そこにより力を入れていくためには、社会福祉協議会や地域包括支援センターとタッグを組み合わせながら、より充実させていきたい。多世代交流というところで、多世代交流センターとも、タッグを組んでやっていけるといいと感じた。
司会	多世代交流センターは具体的には何を行っているのか。
委員	多世代交流センターは、東部と西部2か所あり、多世代の企画をやってい

	<p>る。今まで仕事の中で交流する機会があまりなく、そこを今後、一緒に何か活動していけるといいのかなと思っている。</p>
事務局	<p>市内にある介護付有料老人ホームで、コミュニティ・ガーデンというグループを行っている。主にはガーデニングをしているが、その有料老人ホームではこども食堂を別で行っており、野菜の収穫をコミュニティ・ガーデンとこども食堂の多世代コラボレーションで取り組んだ。小学生や中学生との交流を通して、認知症のことも知ってもらおう多世代の交流があると、小さいときから知っていただくきっかけになる。</p>
委員	<p>学校では、コミュニティスクールという活動をしていて、地域の商店や、機関、学校に大人が入り、自分の仕事を説明する、私の場合は認知症のことやヤングケアラーのことを説明する。第二小学校、井口小学校と第二中学校のにしみたか学園でまち作りプランナーになろうという授業があり、様々な企業、会社の話を聞き、子どもたちが町を作っていくプランを立てる取り組みをしている。三鷹はコミュニティ醸成を続けてきて、学校コミュニティと様々な機関との歩みは少しずつ花開いている実感もある。子どもたちに話をすると、関心を持ってくれるので、大人が子どもと接点を持つていくことは非常に重要である。認知症サポーター養成講座も、地域包括支援センターが学校や学童に対して実施しているが、授業で取り込むという動きも、出始めたと聞いているので、さらに期待できる。また、ヒアリングのプロセスが素晴らしいと思っていて、それぞれの地域で、当事者のお話が、非常に地域の方々が関心を寄せる、自分ごととして捉えていく、主体性が引き出されていく効果が非常にあると思う。当事者の方が出てきてくれること、自由に発言して下さることが、認知症啓発していくこと、ともに生きるまちを作っていく上で、非常に有効な取り組みとして評価している。</p>
関係者	<p>私の住んでいる町でも、小学校の先生と今週から打ち合わせをすることになっている。地域包括支援センターと連携をして認サポをしたいということで、走り始めている。そこで私がどんな役目をするかということ、これから打ち合わせをするところだったので、いいお話が聞けたと思った。</p>
関係者	<p>どんなことを知りたいですかという質問について、これに答えるシステムや施設は、ここにはあるのか。その施策の中で、応えようとしているのか。</p>
事務局	<p>条例で方針をつけさせていただき、その後で計画を立ていく考え方をしているので、時期なども含め一つ一つ検討し、実現できることから始めていく。今できてないことは、どうしたら実現していけるのか、皆様からもご意見、ご指摘をいただきながら進めていきたい。</p>
関係者	<p>どうして認知症になるのか、認知症とはどんな状態なのかという質問について、メカニズム、意識を小学生にもわかるように説明していただきたい。みんなが知っている、常識として知っているような社会になったらいいと思う。</p>
司会	<p>なぜ認知症になるかと問われて、それが大人に説明はある程度できるかもしれないが、子どもに説明すると結構難しい。</p>
委員	<p>駅周辺地域包括支援センターが主催のヒアリングと一緒に参加した。いろんな世代の方と一緒にグループワークをして、実際に、もし認知症になって、</p>

	<p>住み慣れたこの三鷹で生活していくことを考えたときに、実際生活している中で、認知症に対する理解が深い方が周りにいることが一番の安心に繋がるという話が出ていた。資料 5 の 3 の各主体の責務・役割の (3) 事業者等の役割の中に、認知症の人等が利用しやすいサービス提供時、従業員の教育と書いてある。認知症になっても色々なところに行く機会があるので、行った先の方たちがある程度理解のある方で、配慮してくださるのが一番安心に繋がるという声があったため、基本的政策の教育は子どもたちの教育も含め、事業所や商店の方など、実際に生活する中で関わる地域の方以外の部分に、住民だけでなく、この事業者の方々にも理解していただける取り組みをつくり、社協や包括も一緒に取り組んでいくといいと思う。</p>
委員	<p>認知症の人とは何か、定義は何と考えているか、という疑問がある。私のクリニックの場合、約 9 割の方が、ご自身でない方が予約をしている。自分の意思で病院に行くと言うより、周りが心配して連れてくる、もしくは、診断をつけたくて連れてくるようなことが多い。認知症の人という言葉はどう解釈するかを悩んでいる。実際診断を受けた方がいるので、実際はどうかというところも気になっている。</p>
関係者	<p>認知症の人と呼ばれるよりは、診断あるなし関係なく、認知機能に障害のある人と呼ばれたい。</p>
委員	<p>呼び方については、長年議論されたが答えは出ていない。ただ、その議論の中に答えがあると思っている。</p> <p>資料 5 の 3、各主体の責務、役割というのがあって、ここの (1) が、法律では都道府県の責務とされている。市町村の責務としてはされていない。法律の第十二条都道府県認知症政策推進計画では、認知症の人および家族等と書かれていて、あらかじめ認知症の人および家族等の意見を聞くように努めなければならないと都道府県は定めている。十三条の市町村の政策は、都道府県に従うよう書いてある。そういった法的環境の中で、踏み込んだと思うが、ここで当事者と書き換えた理由は気になる。これ 1 行で、かなり負担が、また行政の方に行くのは確かだと思う。11 番、地域で暮らしたいという意向性とその認知症で生きるということが、マッチすると思う。アンケート結果について、数字が足しても 100% ならない。実数を書いてほしい。この切り口は、現場の感覚が息づいている集計になっているので、三鷹市内の共有というよりも、発信をしてもいいような内容だと思う。非常に前向きだし覚悟のほどがうかがえる資料であることは間違いない。</p>
委員	<p>家族の言葉であるとか、小学生の言葉をそのまま載せたことは伝わってきた。家族とか子どもの率直な意見を見ていて、認知症の問題だけでなく、高齢者のこと、ヤングケアラーのことなど様々なところに繋がってくると思うので、教育も進めてもらえると、将来的に意識が深まり、それが当たり前という社会に繋がっていくと思った。認知症のメカニズム、制度の自立支援も、理解は難しいかもしれないが、そういったことがあるというポジティブなところも、発信して、子どもたちの雑念のない中で、見てもらえると思う。テレビやネット、介護者の方の話を聞いていると、ネガティブなイメージを持ちがちだが、そうなる人ばかりではないし、そういう困りごとでない人たちもいるというところをお伝えしても、テレビの刺激的なイメージとかが先行してしまう。そういった面では、家族介護を介護者の支援という明記のところで、いい介護をされている方もいれば、ご本人の思いがないがしろになって、苦しい思いをしている当事者の方もいるので、そこも含めた</p>

	<p>施策、条例が出来上がると、家族の意見聴取とか、積み重ねがこの先に繋がっていくと思うので、少しずつでも進み、実感出来る日が来たらいいと思う。</p>
関係者	<p>アンケート結果にある早期発見と相談支援の充実は、介護者にとって極めて重要である。私自身、父の介護では知識不足から本人の言動を否定していたが、後にそれが本人なりの真実や愛情であったと知り、早くに理解していればより良い対応ができたと後悔している。また、母の介護で共倒れ寸前となった際、地域の介護者談話室で経験者に相談できたことが救いとなり、施設入所の決断ができた。介護者が孤立せず、正しい知識と相談の場を持てる支援体制が不可欠である。</p>
関係者	<p>認知症という呼称は既に社会に定着しているため、学術的な定義の見直しより、現状の名称を維持すべき。重要なのは、当事者が外出時に周囲から誤解されない環境作りである。啓発においては、専門的な病状解説に終始するのではなく、「どのような状態が認知症で、その際にどう助ければよいか」という具体的な支援方法をセットで伝えるべき。細かく突き詰めて学術的に病気がどうだとか、どういう状態が認知症の病状として正式に当てはまるかという事よりも、認知症は認知症の人でいいのではないかと思う。それよりも社会での助け合いに繋がる教育が求められる。</p>
司会	<p>全く知らない人が、この人は認知症だから助けなくてはとなるには相当世の中が変わらないといけない。それぞれが変わるために、条例ができて教育が始まって、実際にそれができるのは10年ぐらい先なるかもしれないが、第一歩という意味では、条例があって計画があってその中に今ご指摘あったようなことまで入ってくるといい。</p>
司会	<p>社会参加の機会確保について当事者の目線からどう思うか。</p>
関係者	<p>具体的なことを考えれば、例えば引き算が出来ない人と、足し算が出来ない人がいるとしたら、2人タッグを組んで事に当たれば、2人で一人前になる。そういうネットワークを作ることによって、仕事が具体的にできるというイメージ。具体的にそういう活動をしたいとも思っている。社会参加の機会確保は、仕事をするのが一番手取り早く、一番楽しいところ。実際に仕事をする上で、こんな手助けがあるといいなということを経営者とする人が存在すると思う。いろんな認知症の人を100人知っていて、この人とこの人が組めばこんなことができるというようなマネジメントする人がいると助かるし面白いと思う。</p>
関係者	<p>1年前の夏に東京都多摩若年性認知症総合支援センターの紹介で今の職につながった。この職場だったらいけると確信を持って押してくれたのではないかと思う。難しいこと言われているのではなく、コミュニケーションはできるということを知ってくれたと思う。なにかを数えろとか言われると出来ないことはあったが、コミュニケーションの部分では、営業をずっとやってきたので、能力は落ちてない自分の中でも自信があったし、診断書にも書いてあった。なので、そういうところを押しもらい、介護付有料老人ホームに就職できた。コミュニケーションと体力では、自分の能力を活かせるかなということがあったので、後押ししてくれる人とかマネジメントしてくれる方がいたというのがありがたかった。その仕事に至る前に、スーパーの品出しの仕事をしたが、日付を見た瞬間にどっちが新しいか古いかが分からなく</p>

	<p>なってしまった。アルツハイマーで即時記憶が使えず、バタバタしてしまい、あっという間にクビになった。そんな難しい仕事じゃないと思ったができなかった。マッチングとしてはミスマッチだったと思った。</p>
事務局	<p>今回家族介護者等の支援体制ということで、改めて基本的施策今まで8つ、提案していたものを、9つ目めで頭出しし、強く取り組んでいくべきだと考えている。家族介護者支援の具体的な事業という、教科書的に見ればレスパイト関することや、仕事が継続できる支援だが、統計、他の調査も見ると、家族の方はご本人が外出してしまう、1人で外出するときに多くの不安を抱えているという統計も目にする。そういう効果的な事業を掘り下げていきたい。</p>
関係者	<p>家族と二人暮らしで、目を離せない状況になると仕事との両立は難しい。私自身、自費介護は自分の給料より高くつき、介護保険も短時間利用が中心のため、不本意ながら離職せざるを得なかった。このまま家に閉じこもれば、症状が悪化するという不安が募った。他自治体で賑わう認知症カフェのように、親子で安心して一緒に出かけられる場が三鷹にもあるのか。現状の支援には限界を感じている。</p>
事務局	<p>配布資料の認知症にやさしいまち三鷹ガイドブックに地域交流活動の場を掲載している。市民の方が主催して認知症のサロンだとか、地域包括支援センターが主で実施しているコーヒESHOPで開催している認知症カフェ、その他にも市内で当事者によりそう交流の場が展開されている。認知症をキーワードとしていない集いも地域の中でいろいろあるので、ご本人やご家族のお好みに合わせてご紹介できる情報を地域包括支援センターが持っている。</p>
関係者	<p>私の両親はひとり歩きなどで外に出ることはなかったが、「テレビの中に娘がいる」と思い込み、テレビを抱えて裏側まで必死に探し回る母の姿を見て、片時も目を離せない介護の現実に直面した。三鷹を、市民全員が家族のように見守り合う「ともに生きるまち」にしたい。誰もが家族のつもりで声をかけ合い、もしひとり歩きしても、地域の放送で知らせて皆で無事に家へ戻せるような仕組みが三鷹にもあれば、家族としてこれほど心強いことはない。まち全体で支え合う姿を理想だと思う。</p>

(2) 令和7年度開始の認知症施策について

ア 認知症ピアサポート推進事業 <説明 谷川><木之下委員>

事務局	<p>9月からスタートする事業。皆さんが住みなれた地域いつまでも安心して自分らしく暮せるまちを目指して、認知症と診断された直後の不安などの空白の期間をなくすために、認知症の当事者同士が支え合うピアサポートの活動を中心とした補助事業を開始した。東京都の補助金を活用する事業で、8月中旬に、ホームページ等でこの事業の募集を行った。その上で認定 NPO 地域認知症サポートブリッジと8月の下旬に契約をした。認定 NPO では既にピアサポートの取り組みをされているが、補助事業を活用し、さらに市民の方たちに広く周知していきながら、診断後の相談の充実を図っていく。</p>
委員	<p>認定 NPO 地域認知症サポートブリッジがクリニックの場を借りて、認知症の人が認知症の人をサポートするピアの活動をしている。全国各地で認知症の人の寄り合いとか、家族会が、様々な団体あるいは任意団体がある。本人同</p>

	<p>士、認知症の人同士、家族介護者同士、お互いに悩みや行き詰っているところを、それぞれ研鑽のために集まっているのはよくある話だが、認知症に関しては本人同士というのがなかなかない。認知症の診断後、診断された人のことをもう少し支援できるのではないかと、単に診断して終わりではなく、診断後支援を行うよう言われ始めている。その柱となるだろうと目指されているピアサポートを行っている団体は全国で知る範囲で 10 団体もない。ピアサポートを受けるかは、受ける人に希望がないと意味ないが、希望者は結構いる。地方放送局のローカル番組で、認知症の人の認知症が進行する姿が描かれた番組があり、ピアの活動に診断された人が困りごとを相談するというよりも、ライフライン、生きていくためのツールと表現していた。認知症の人がピアサポートを通して出会うことで、力づけられるという事実がある。今回この補助金で、もう少し開催頻度を高めて貢献していきたい。</p>
--	--

**イ 認知症ひとり歩き高齢者等見守りシール事業 <説明 吉野>**

<p>事務局</p>	<p>この事業は、どこ知る伝言板というインターネット上の、匿名でやり取りできる伝言板のサービスを利用した事業である。全国で 358 の自治体が、導入されている状況で、シールには二次元コードがついている。衣類などにつけて洗っても落ちない耐洗ラベルと、財布や杖等につける仕様の蓄光シールの 2 種類を、申請のあった方に配布している。ラベルの二次元コードを読み取ることで、インターネット上の伝言板に繋がるというような仕組みになっている。実際に、シールを身につけた方が、ひとり歩き等で言葉を伝えられないことがあった場合に、それを見かけた方が、こちらの二次元コードを読み取ると、シールを読み取った段階で、登録したメールアドレスに一斉に読み取りがあったことが通知される。また、読み取った方は、匿名でやり取りできる伝言板のサービスにつながり、ご家族も通知があったメールから URL をクリックするとそちらの伝言板につながるシステムとなっており、伝言板を用いて今の状況やいる場所を匿名でやり取りできるサービスとなっている。実際に 9 月 8 日から申請の受け付けを開始し、随時事業を開始していく予定。また衣服等につけたら終わりではなく、周りの見かけた方が、声かけをして必要なときに読み込むことが必要になってくるので、地域の見守りの選択肢の一つとして活用していきたい。9 月 7 日広報みたかで特集号を組んで市民のみなさんへ周知する。</p>
------------	--

**ウ 第 13 回認知症にやさしいまち三鷹イベント <説明 谷川>**

<p>事務局</p>	<p>例年、この時期に 9 月に認知症の普及啓発のイベントを実施している。今年度は 9 月 28 日の午後にみたか産業プラザ 7 階で行う。定員は 100 人、第 1 部は「誰もが活躍できるまち、認知症という個性を生きる」というパネルディスカッション、第 2 部は「父と僕の終わらない歌」という映画を上映する予定。参加の申し込みは、チラシと 9 月 7 日号の広報みたかに記載の二次元コードの方で申し込みを受け付けるので、ご興味のある方へご紹介いただきたい。共催として東京都認知症疾患医療センターと NPO 地域認知症サポートブリッジ、三鷹市と地域包括支援センターも加わり盛り上げていく。また認知症にやさしいまち三鷹ガイドブックを去年度から大幅にリニューアルをした。神崎先生のご挨拶から始まり、目次は当事者の方からのアドバイスで、必要などころにすぐに目がいき分かりやすくしたいということで、当事者に目次のデザインをお願いした。その他も複数の当事者からの経験や意見を参考に分かりやすい内容の工夫をした。ガイドブックは発展的なものなので、随時ご意見いただきたい。</p>
------------	---

配付資料

- 資料1 令和7年度第1回三鷹市認知症地域支援ネットワーク会議議事録
- 資料2 認知症地域支援ネットワーク会議委員及び関係者名簿
- 資料3 認知症条例の制定に向けた当事者等・市民意識調査（案）【報告書】
- 資料4 認知症条例の制定に向けた当事者等・市民意識調査結果（案）【概要】
- 資料5 「認知症とともにいきるまち三鷹条例（仮称）」の構成案について
- 資料6 認知症ピアサポート推進事業【プレスリリース】
- 資料7 認知症ひとり歩き高齢者等見守りシール事業 チラシ
- 資料8 第13回認知症にやさしいまち三鷹イベント チラシ
- 資料9 令和7年度認知症にやさしいまち三鷹ガイドブック

次回 令和7年11月6日（木）予定